

世界の窓

②

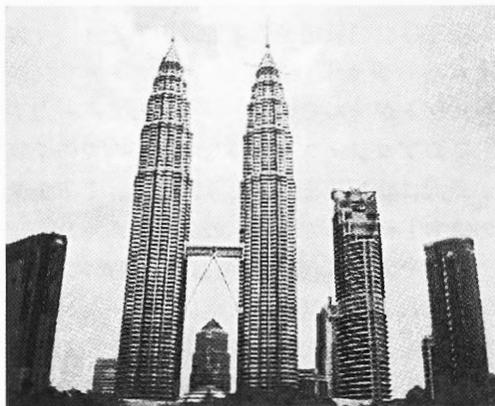
ICA2008年クアラルンプール大会参加記

北海道日高支庁 吉田 千絵

Chie YOSHIDA

1 クアラルンプール大会概要

2008年7月21日から28日までの8日間、マレーシアの首都クアラルンプールのクアラルンプール・コンベンション・センターにおいて、ICA (International Council on Archives) の大会が開催された。



会場から見たツインタワー

本大会については、既に会報83号で神戸大学佐々木和子氏が大会概要及びSPA運営委員会及び総会報告を、国立情報学研究所古賀崇氏が、自ら報告されたセッションに関する報告及び参加されたセッションの紹介をされているので、そちらも参照されたい。

クアラルンプールは、近代的なビル群と昔ながらの建物が共存し、全身を黒の衣服で覆ったアラブ系の女性がいるかと思えば、夏らしい服装をした若い女性の姿があるなど、様々な人々の行きかう街であった。

今回の大会も、なじみの顔との4年振りの

再会がある一方で、ヨーロッパで開催される大会などではなかなか交流することのないアジア諸国の参加者も多かった。また、どれに参加しようかと迷うほどの数多くのセッションが準備されており、どれも非常に興味深いものであった。

ここでは筆者が参加の機会を得たものなかで、特に興味を引かれたいくつかのセッションについて、その概略を報告したい。

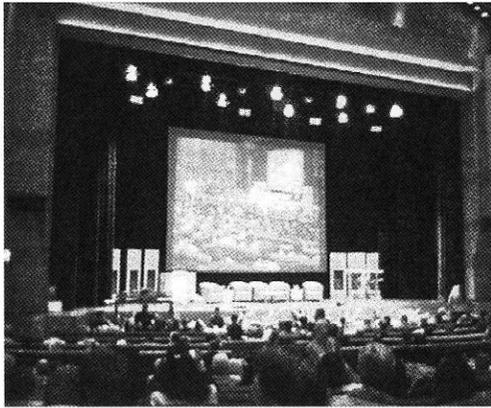
2 InterPARES 3プロジェクト

このセッションは、オープニングセレモニーに続いて、7月22日の午後開催された。

InterPARES は The International Research on Permanent Authentic Records in Electronic Systems の略語であり、デジタル形式で作成あるいは保存された真正なレコードを、長期的にわたって保存するために必要な知識を開発し、その基礎となる標準や戦略、アクションプランなどを作成することを目的とするもので、カナダのプリティッシュコロンビア大学のルチアナ・ドゥランティ博士が中心となって進めているプロジェクトである。

これまでに、InterPARES 1 (1999-2001) 及び InterPARES 2 (2002-2007) の2つのプロジェクトが終了しており、InterPARES 1においては、データベースやドキュメント・マネジメントシステムで作成・保存されるレコードの真正性を確保するための理論や手法を開発し、InterPARES 2においては、複雑なデジタル環境にある、具体的な業務活動で

作成されるレコードに焦点をあて、それらがライフサイクルのすべての段階において信頼性と正確性を保つための問題についての検討を行った。



開会式にて

今回のセッションで報告された InterPARES 3プロジェクトは、これらを受けて、2007年に開始され、2012年を目途としたプロジェクトである。

このプロジェクトは、14の TEAM から構成されている。TEAM は、Theoretical Elaborations into Archival Management の略語であり、これらは国（一部は国の連合体）を単位として作られている。その単位は次のとおりである。

アフリカ、ブラジル、カナダ、中国、コロンビア、イタリア、韓国、マレーシア、メキシコ、オランダ及びベルギー、ノルウェー、シンガポール、イギリス及びアイルランド、トルコ。

このプロジェクトの目的は、デジタルシステムにおいて真正なレコードを保存するための理論を、中・小規模なアーカイブズ組織において適用実験を行うことである。

これはプロジェクト 1 及び 2 で開発された理論や手法が現実的にはなかなか適用できないという声を背景として動いている。

この日のセッションは、「アジアにおける InterPARES 3プロジェクト」というタイトルで、上記 TEAM のうち、マレーシア、韓国、

中国、シンガポールのアジア諸国による経過報告がなされた。

マレーシアでは、研究データの保存に関するケーススタディを行っている。現在、保存の対象となるデジタルデータはないが、将来的な必要性を見越して、それまでに準備すべき事項の洗い出しを行っている。

具体的には、イギリスのデータアーカイブズの手法を取り入れるとしており、2008年までは既存の文献調査を行い、2009年から10年にかけて、データ分析を行うとのことであった。

韓国では、InterPARES 1、2の成果を基礎として、資源管理システムの構築及びマイグレーション技術の開発を行い、これらを基礎としてレコード・マネジメントシステムを構築し、電子文書保管所を作ることを目指している。

現在は計画策定後の準備段階であり、今後それらの調査及び結果報告という形でプロジェクトが進んでいくということであった。

このプロジェクトに関しては国内での予算が潤沢に盛り込まれており、また、IT企業の協力も得られているとのことであった。

中国では、四川省で発生した大地震により、保存されるべき紙文書の実に40パーセントが判読不能になったという現実があり、この意味でも電子記録管理システムの構築に特に力を入れているということであった。プロジェクトにあたっては、「グローバルに考え、ナショナルに設計し、ローカルに行動する」をスローガンとしており、国家的な戦略も同時並行で策定中である。また、現在は関連する文献の翻訳がほぼ終了している。

大きな自然災害による損失を経験した直後でもあり、特にリスクマネジメントという観点を重要視していることを強調していた。

最後にシンガポールであるが、ここではウェブサイトの保存に関するプロジェクトが組まれており、サイトを、現用 (Current)、定期的 (Regulatory)、歴史的 (Historical) に区分している。

手法は、IIPC (International Internet Preservation Consortium)、オーストラリアのPANDRA プロジェクト、カナダのECHO プロジェクトなどを参考にしている。

各TEAMとも、まだプロジェクトの途上であり、理論を適用した場合の問題点等は具体的に見えていないのが現状である。しかし、真正な電子記録の長期保存という問題について、国を単位としたプロジェクトが生まれ、それらを国際的に持ち寄って検討する場があるということは、各国の課題を明確化するとともに、国際的な標準や理論をより汎用性のあるものに見直すうえで非常に有益なことであると感じた。

ただ、このようなプロジェクトに参画するには、予算や人材のほかに、具体的に理論を適用し問題点を検討するテストベッドという〈場〉を用意しなければならないこともあり、そう簡単にはいかないのが現状だろう。

3 アーカイブズ記述の国際標準

アーカイブズ記述の国際標準は、これまで、一般原則であるISAD(G)及びオーソリティ記述の標準であるISAAR(CPF)が作成されている。

今回のセッションの中に、2007年に作成されたISDF(International Standard for Describing Functions)及び2008年に作成されたISDIAH (International Standard for Describing Institutions with Archival Holdings)を紹介するものがあつたのでその概略を報告する。

まずISDFであるが、これはアーカイブズを作成し、保存に関与してきた団体をもつ「機能」(Function)を記述するための標準である。この「機能」は、それらの団体の持つ主要な責務を表す。この「機能」を記述し、ISAD(G)に基づいて作成される記述やISAAR(CPF)に基づいて作成されるオーソリティ・ファイルにリンクさせることで、利用者は必要な情報にすばやくたどりつくことが可能になる。

また、この「機能」に関する記述は、レコー

ドを評価選別する際の基礎となるものである。

この標準は、以下の4つのエリアで構成される。

- 1 個別情報のエリア
- 2 記述のエリア
- 3 関連する機能/活動のエリア
- 4 コントロールのエリア

次にISDIAHであるが、これは、アーカイブズを所蔵する機関に関する記述、つまり、例をあげれば、各史料保存機関の「利用案内」に含まれているような情報を記述する際の標準である。

これらは、オンラインカタログによる検索の際に必要なものであり、記述を標準化したリ、共有したり、交換したりする際の一般原則を提供する。この標準は、アーカイブズ所蔵機関だけでなく、図書館や博物館といった他の機関にも使え、これらの機関をも含めた形での史料情報の共有化の際に役立つ。この標準を使用して作成された記述は、ISAAR(CPF)を使用して作成したオーソリティ・ファイルの一部を構成する。

標準は以下の6つのエリアから構成される。

- 1 個別情報のエリア
- 2 コンタクトのエリア
- 3 記述のエリア
- 4 公開のエリア
- 5 サービスのエリア
- 6 コントロールのエリア

また、この標準の第6章では、ISAD(G)及びISAAR(CPF)による記述と、ISDIAHによる記述とをどうリンクさせるかについて述べられている。

記述に関する標準は、ISAD(G)から出発してコンテキスト情報記述の標準としてのISAAR(CPF)が登場し、今また、「機能」を記

述する標準として ISDF、コンテキスト情報のうちアーカイブズ所蔵機関特有の情報を記述する標準 ISDIAH が作成された。

これらの標準を今後、実際の目録記述に生かしていくためには、標準が作成された背景をきちんと理解し、それぞれの関係をここで一度整理しておく必要性を強く感じた。

4 「アーカイブズ」の多様性

アーカイブズ教育という点では、オーストラリアとアメリカが中心となり、環太平洋諸国を対象としたアーカイブズ教育プログラム PACRIM プロジェクトの報告が興味深かった。

この教育プログラムにおいては、学生たちの生まれ育った社会的背景は多種多様であり、従来のヨーロッパ諸国を中心とした理論だけでは扱いきれない問題があるとの報告はとても興味深かった。

具体的な例として、オーストラリアの先住民民族アボリジニを出自に持つ学生がプレゼンテーションを行った。アボリジニのコミュニティにおいては、「記録」とは例えば独特の伝統的な絵画であったり、オーラルなものであったりし、「文字で書かれた」記録を扱うレコードキーピングシステムではうまくいかない。そこで、文字を使用しないドキュメンテーションの手法を開発するなど、独自の手法を考えなければならない。こう考えると、「アーカイブズ」という言葉を、「そのコミュニティの中で「記録」と扱われているもの」という広い意味で使用することになる。「記録」を残さなければならないコミュニティは様々であり、アーカイブズを扱う人間は、そのコミュニティをしっかりと観察して、それにあった手法を見出す力が必要となる、と痛感した。

また、学生たちが、このような視点で自分の所属するコミュニティを見つめ直し、それぞれのコミュニティにとっての「記録」とは何かを考えるという経験は、今後彼らがアーキビストとして仕事をするうえで非常に重要

なものだと感じた。

5 おわりに

以上、自分の興味の向くままにあちこちのセッションに参加し、その概略を報告してきた。

このほかにも、国際会議でなければ聞くことのできない各国の史料保存に関する現状報告を聞くことができ、短時間ながら、いろいろな国のアーキビストと言葉を交わすことができた。

また、言語的な制約から、自分が果たしてきちんと理解できていたかどうか、帰国後関連するウェブサイトや雑誌記事などに目を通す機会を持つこともできた。自分にとって非常に貴重な経験であったと思っている。

今後は、今大会で得られた興味の<芽>を、大事に育てていこうと思っている。